【原著論文】

創作と振り付けを含むダンスワークショップ教材の効果
－小学６年生による自由記述の内容に着眼して－

The effects of dance teaching materials including both "dance creation" and "choreographed dance" in workshops
−focusing on the free writing survey by elementary school children–

安達詩穂[*1]　八木ありさ[*2]

Abstract

In order to explore the effects of dance teaching materials including both "dance creation" and "choreographed dance", the research was conducted using text mining in analyzing the experiences of elementary school children who participated in a dance workshop run by contemporary dance artists. The subject children were aged 11 and 12 years old.

The results showed that the number of descriptions of "dance creation" were higher than those of "choreographed dance". From the cluster analysis of described words, it was recorded that the participants had feelings of "good", "enjoyment" and a sense of "achievement" for the activity of "dance creation" in small groups. This feeling was promoted by practicing, by showing their own performance, or by watching what the artists were doing. The effects of small and large group size on elementary school children are discussed. Learning in small groups provides a more relaxed learning environment where children feel less anxiety and are able to communicate more easily and freely with one another. On the other hand, learning in larger groups offers more chances to be more self aware and realize one's own individuality by comparing one's self to others. Furthermore, in our sample group "choreographed dance" exhibited a greater positive response in girls than in boys.

Keyword : dance, dance education, workshop, elementary school children, text mining

Ⅰ　研究背景

平成 29 年公示の新学習指導要領では、ダンス領域で扱う運動が「創作ダンス」、「フォークダンス」、「現代的なリズムのダンス」の３種類であることは変わらず、身につけるべき資質・能力が「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の３観点に分けられている[12)]。しかし、「知識・技能」の観点以外は、身につけるべき資質・能力が３つの運動ごとに区別されていない。その理由は定かではないが、これら３つの運動には、目標や方法に重なる部分が多く、実際には明確に身につけるべき資質・能力を区別できにくいことからによるものと推測される。よって、著者らは、３つの運動は区別、選択されるものではなく、合わせて行うことで、ダンスの教育目的が達成できるのではないかと考える。

しかし、太田（2009）は、戦後の保健体育の転換期において、創作ダンスを中心にとりあげることを支持する立ち場が、多くの舞踊家と一部の体育実践家の中にあったことを指摘している[17)p.8]。確かに、昭和 22 年の学習指導要領以降、ダンスは「『作品を教える』ことから『つくる』こと、すなわち自己表現的、創

受付日 2018.1.22 / 受理日 2018.3.30
＊1 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科
＊2 日本女子体育大学体育学部運動科学科舞踊学専攻

造的活動へと転換した[1)pp.18-19]。」とされている。また、中村恭子（2013）は、「現代的なリズムのダンス」の内容が、「特定のステップや踊り方を習得すること」であることは誤解であり、本来は、「生徒一人ひとりが自分なりに音楽のリズムに乗って自由に動きを工夫して踊る」種目であることを述べている[14)p.49]。この指摘から現代でも既成の振り付けを習得するという方法は求められておらず、自己表現や創造性を重視すべきであるという主張を読み取ることができる。

一方、既成作品と創作には長所と短所があり、それぞれの長短を補いながら学習活動をすすめていくべきという立ち場もある[17)p.10]。例えば、「フォークダンス」は、既成の振り付けを習い、音楽に合った特徴的なステップを習得する種目であり、既成の振り付けの習得にも、特定の学習効果が期待できると考えられている。

著者らは、3つの運動全てにおいて、自己表現や創造性を育むための創作活動（以降、「創作」とする）と既成の振り付けの習得（以降、「振り付け」とする）は、区別されるものではなく、合わせて行うことで、新学習指導要領に示された身につけるべき資質・能力として挙げられる目標が達成されるのではないかと想像する。

2010年から、「児童生徒のコミュニケーション能力に資する芸術表現体験事業（芸術家派遣）」などの芸術家派遣型のワークショップが日本に導入された。この事業により、演劇、ダンス・舞踊、音楽、伝統芸能、大衆芸能などの芸術家によるワークショップ型の授業に、他者認識と自己認識の向上、伝える力の向上、自己肯定感と自信の醸成などの効果があることが報告されている[2)]。ワークショップとは、「講義などの一方向な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり、創り出したりする学びと創造のスタイル[16)p.11]」と定義されており、参加体験型、グループ学習を用いること、結果より過程を大切にすることといった特徴がある。これは、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習[11)]」とされるアクティブラーニングとも共通する部分があるといえる。

中でも、高橋ほか（2013）は、コンテンポラリーダンスに取り組んだ学校の効果が、他の芸術に取り組んだ全国平均に比べて高いことを示した。加えて、高橋ほか（2008）は、芸術家によるダンスワークショップを基に長年教材研究を行っており、統一された1つのテーマの下で、既成の演出や、リズムダンス、写真の模倣などを組み合わせた教材を紹介している。つまり、「創作」と「振り付け」の要素を合わせて利用し、これら2つの教材を区別せずに実施しているものと想像できる。

ダンスワークショップの分析から、「創作」と「振り付け」を合わせて行うことによる学習効果を明らかにすることで、ダンスで身につけるべき資質・能力に関する示唆が得られるとみられる。よって、本研究は、実際に行われた芸術家によるダンスワークショップにおける参加者の感想から、「創作」と「振り付け」を含むダンスワークショップ教材の学習効果を明らかにすることを試みた。

Ⅱ　研究目的

本研究の目的は、「創作」と「振り付け」を含む教材を用いた芸術家によるダンスワークショップを事例とし、それに参加した小学6年生による自由記述の内容から、「創作」と「振り付け」を含むダンスワークショップ教材の学習効果を明らかにすることとする。

Ⅲ　方法

1．対象者と対象ワークショップ

対象者は、S小学校の6年生（11～12歳）で、Aクラス30名（男18名、女12名）、Bクラス31名（男17名、女14名）、Cクラス32名（男16名、女16名）である（表1）。

表１　対象者の人数と性別

クラス	性　別	人　数	合　計
A	男 女	18 12	30
B	男 女	17 14	31
C	男 女	16 16	32
総　計			93

対象としたダンスワークショップは、毎授業ウォーミングアップとして行っていた「即興ワーク」と、課題の絵を基に７～８名のグループでダンスを創作する「創作ワーク」、そして芸術家（コンテンポラリーダンスの専門家）が教示する振り付けと「自由な発想で即興的にポーズをする」などのワークが組み合わされた「振り付けワーク」の３つの内容で構成された。これらを、最終日では繋げて１つの作品として、発表した。最終日に発表された作品の時間構成を図１に示した。

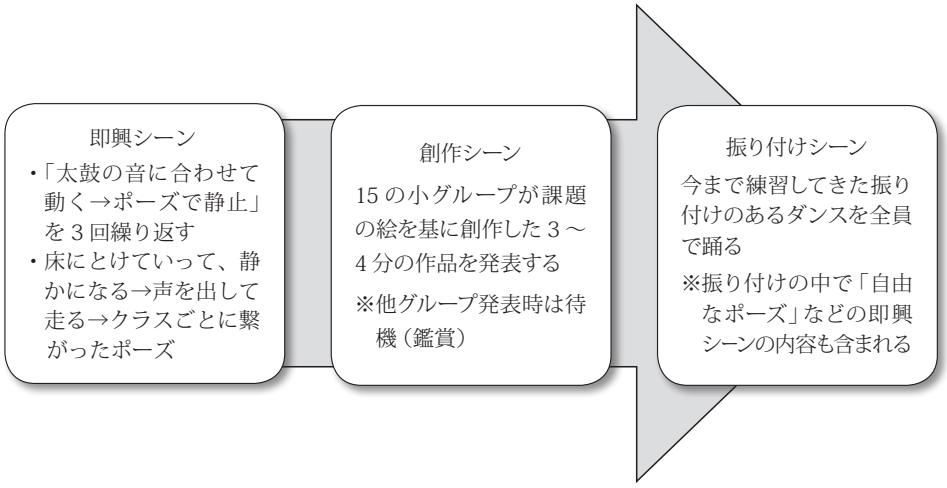

図１　最終日に発表した作品の時間構成

２．調査手順

2014年９月９日～10月14日に、芸術家（コンテンポラリーダンスの専門家）が、各クラスに対し、それぞれ計８回のワークショップを1.5時間実施した。その後、17日に全クラス合同リハーサル、18日に全クラス合同発表会を行った。最終日を終え、別日に、クラス担任によって、自由記述調査が行われた。その結果、受講者97名のうち、93名の回答が得られた（回収率95.9％）。なお、本調査は、日本女子体育大学のFD委員会における倫理審査を経て実施し、質問紙およびデータは適切に管理、処理を行った。

３．質問内容

分析で用いた自由記述は、計８回のワークショップおよびリハーサルと本番を含めたこの授業全体の振り返りとしての感想文であった。

４．分析方法

1）テキストマイニング

本研究は、樋口（2017）による内容分析の知見を参考に、テキストマイニングソフトKH Coder ver.2を

用いて、文章を 22 品詞に切り分ける形態素解析を行った。その後、小学生特有の「きん張」などの語は、自動抽出では、「きん」と「張」に切り分けられてしまうため、「きん張」で 1 単語として数えるように強制抽出語の設定を行い、「緊張」と同じものと数えるようにコーディングを行った。このコーディングの作業では、「つくる」、「創る」、「作る」などの語も、小学生による記述においては区別がないと判断し、同じ「つくる」として数えるよう設定した。また、「ん」や「ぬ」などのその語だけでは、回答者の意図を読み取ることのできない語は、前後の語および文脈を確認し、強制抽出語か使用しない語に設定した。この作業は、トライアンギュレーションとして、小学生の記述の特徴を良く知る小学校教諭 1 名と、ダンスおよびデータ処理の経験がある研究者 2 名で行った。

2）多次元尺度構成法とクラスター分析

出現したコード同士の関連を確かめるため、多次元尺度構成法を用いて、各コード間の距離を確かめた。樋口（2017）によれば、語句がデータ中でよく一緒に使用されることを「共起する」と言い、共起することは、その記述された語句同士が互いに強く関連していることを指す。よって、まずは、語句の共起頻度から、その語句同士の距離を Jaccard 係数を用いて算出する。そして、共起頻度の高いものを近く、低いものを遠くになるよう図示し、分析に用いた。また、語の関連する強さによってグループ分けを行うため、Jaccard 係数を用いて算出した距離に基づくクラスター分析（Ward 法）を行った。

なお、多次元尺度構成法は、ある実験などによる刺激間の非類似度データからそれらの刺激の構造モデルを解析するための方法として利用されており、矢入と前野（2007）によれば、カーネル主成分分析との関連があることなどから、再注目されている多変量解析の一方法である [25)p.345]。よって、本研究においても、クラスターおよび 2 次元の軸の解釈を行い、ダンスワークショップによる学習効果の構造を調べた。

3）2 コード間の共起関係

「創作」と「振り付け」との関わりの強い語を明らかにするために、Jaccard 係数を用いて、2 コード間の共起関係を点検した。出現回数が 1 回のコードは除き、同一コードの組み合わせを除く全ての 2 コード間の共起関係を解析し、「創作」と「振り付け」と関わりが強い語を抽出した。

4）コード数の差

性別によって出現したコード数に差があるかどうかを、カイ 2 乗検定によって確かめた。

Ⅳ　結果

1．総単語数と各コードの出現回数

強制抽出語 86 種類と使用しない語 130 種類を設定した後に集計された語は 2344 語であった。このうち、異なる語は 775 種類であった。内訳は、男子が 1226 語（一人当たり 23.58 語）、女子が 1118 語（一人当たり 27.27 語）であった。これらを上述した方法でコーディングした結果、332 コードに分けられた。この 332 コードの中で、10 回以上出現したコードを表 2 に示す。表 2 より、10 回以上出現したコードは、54 種類であった。本研究では、出現回数が 1 回のコードが 135 種類と多かったため、定量的な比較を重視し、先行研究 [6)] を参考に、10 回以上出現した 54 種類のコードを分析対象とした。

「創作」と関係があると考えられる「創作の教材」（45 回）および「つくる」（42 回）と、「振り付け」と関係があると考えられる「振り付け」（19 回）と「既成の振り付けがある教材」（12 回）を比べると、「創作」と関係があると考えられる 2 種類のコードの出現回数の方が多かった。よって、「創作」の方が印象に残っていた回答者が多かったか、あるいは強く印象に残って何度も記述した回答者がいたといえる。

表２　10 回以上出現した 54 コード

番号	コード	出現回数	番号	コード	出現回数
1	やる	90	28	少し	24
2	達成	87	29	むずかしい	23
3	ダンス	84	30	分かる	23
4	本番	70	31	学ぶ	22
5	最初	68	32	緊張	21
6	ない	58	33	たくさん	20
7	思う	55	34	恥ずかしい	19
8	良い	54	35	合わせる	19
9	練習	54	36	振り付け	19
10	グループ	51	37	大きく	16
11	創作の教材	45	38	覚える	15
12	つくる	42	39	ちがう	15
13	楽しさ	41	40	周りの人	15
14	とても	40	41	クラス	15
15	授業名	34	42	間違える	13
16	先生	33	43	頑張る	13
17	できない	30	44	表現	13
18	考える	30	45	感謝	13
19	身体の部位	30	46	全然	13
20	１つ、２つ	30	47	嬉しい	12
21	協力、団結	29	48	既成の振り付けがある教材	12
22	言う	29	49	だんだん	12
23	自分	29	50	変わる	11
24	見る	28	51	アイデア	11
25	動く	27	52	お客さん、家族	11
26	最後	25	53	いろいろ	11
27	今後	24	54	他	11

２．関連するコード

出現したコード同士の関連を確かめるため、多次元尺度構成法により、各コード間の距離を２次元空間上にプロットした図２を作成し、コードのグループ分けを、Jaccard 係数を用いて算出した距離に基づくクラスター分析（Ward 法）の結果に基づき、７クラスター設定し、図２に合わせて示した。

図２より、クラスター２に見られるコード同士に特に強い関連が確認され、これらのコードは、出現回数（表2）の多いコードであった。また、「創作」と「振り付け」と関連のあるコードは異なるクラスターに分類され、それぞれで関連が強いコードが異なることが明らかとなった。「創作の教材」が含まれるクラスターには、出現回数の多い「達成」や「本番」が含まれ、「既成の振り付けがある教材」が含まれるクラスターには、「緊張」、「周りの人」「たくさん」、「間違える」などのコードが含まれた。

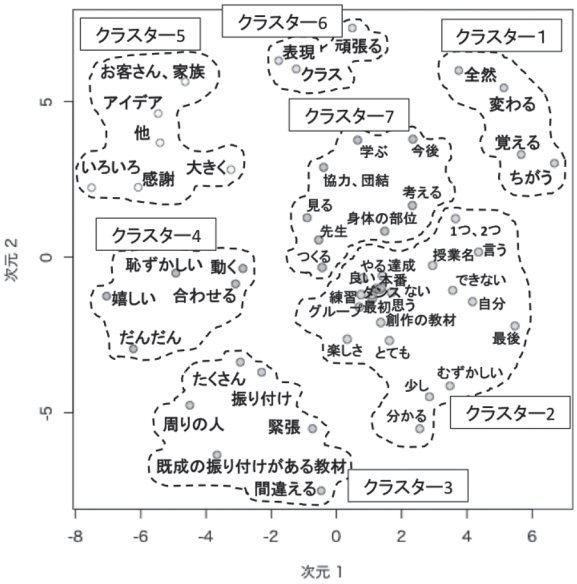

図２　ダンスワークショップ参加後の自由記述に対する多次元尺度構成法・クラスター分析結果（２次元解，最小出現回数11）

3．ダンスワークショップによる学習効果の構造

表３に、７つのクラスター名と、各クラスターに分類された語が含まれる記述例を示す。表３に示すような記述例を参考に、「変わる」「覚える」「ちがう」などから成るクラスター１を「振り付け等の変更に対する努力」、「創作の教材」、「思う」、「良い」などから成るクラスター２を「創作過程で感じる達成感」、「振り付け」、「間違える」、「緊張」などから成るクラスター３を「間違えないようにする意識と緊張」、「恥ずかしい」、「嬉しい」、「合わせる」などから成るクラスター４を「恥ずかしさの軽減と嬉しさ」、「アイデア」、「他」「感謝」などから成るクラスター５を「他の人やお客さんへの感謝」、「クラス」、「表現」、「頑張る」から成るクラスター６を「クラス単位での頑張り」、「学ぶ」、「協力、団結」、「考える」などから成るクラスター７を「今後に活きる協力に関する学び」と命名した。

よって図２より、横軸においては、クラスター１「振り付け等の変更に対する努力」、クラスター２「創作過程で感じる達成感」、クラスター７「今後に活きる協力に関する学び」が正方向、それ以外が負方向へと寄与した。

縦軸においては、クラスター１「振り付け等の変更に対する努力」、クラスター５「他の人やお客さんへの感謝」、クラスター６「クラス単位での頑張り」、クラスター７「今後に活きる協力に関する学び」が正方向、それ以外が負方向へと寄与した。

表３　クラスター名と分類された語を含む記述例

クラスター	記　述　例
【クラスター 1】 振り付け等の変更に対する努力	「チームで作ったダンスは、３回もかわりました。だけど、本番までに覚えることができました。辛かったです。」
【クラスター 2】 創作過程で感じる達成感	「創作では、リーダーを中心に、どのような動きにしたらよいか、表現の工夫を考えることでまとまったので、仲間との協力は大事だなと思いました。」
【クラスター 3】 間違えないようにする意識と緊張	「ダンスのふりつけでまちがえることが多かったり、手を左、右、両手とたたくあとのジャンプのタイミングや立つときのタイミングがわかりませんでした。」
【クラスター 4】 恥ずかしさの軽減と嬉しさ	「本番はぼくからははずかしいグループダンスもできてそして先生がつくったダンス（省略）もできてふりつけの忘れもなくなっておどれたのでうれしかったです。」
【クラスター 5】 他の人やお客さんへの感謝	「先生のアイデアや他のグループの動きを参考にすることはよりよいダンスにできる一歩なので、とても有り難かったです。」「お客さんから大きな拍手をもらいました。」
【クラスター 6】 クラス単位での頑張り	「先生方のフリを見ていたおかげで発表のときは、上手くできたと思います。さらにこのことがクラスの団結を表したのではないかと思いました。」
【クラスター 7】 今後に活きる協力に関する学び	「学んだことはダンスを合わせておどることで協力するということです。」「この授業を通して、考える事の大切さ、あと協力することの楽しさを学ぶことができました。」

※下線は各クラスターに分類された語を示した

4．「創作」と「振り付け」に関するコードと関わりの強いコード

出現回数が１回の 135 コードを除く、197 コードのうち、同一コードの組み合わせを除いた全 38612 の組み合わせを分析対象とした結果、jaccard 係数は、最低値 0、最高値 0.90、平均値 0.04 であった。よって、

jaccard 係数 0.30 以上のコード間に強い関連があるとみなし、「創作」に関わる「つくる」「創作の教材」と、「振り付け」に関わる「振り付け」「既成の振り付けがある教材」の 4 コードと強い関連のあった 17 種類のコードを表４に示した。

表４　「つくる」「創作の教材」「振り付け」「既成の振り付けがある教材」と関連のあるコード

	つくる	創作の教材	振り付け	既成の振り付けがある教材
良い	0.43	0.41	0.20	0.14
ない	0.28	0.32	0.24	0.13
楽しさ	0.34	0.34	0.28	0.15
達成	0.47	0.48	0.22	0.14
つくる		0.32	0.17	0.06
やる	0.44	0.48	0.20	0.13
思う	0.31	0.32	0.14	0.16
覚える	0.10	0.13	0.36	0.13
創作の教材	0.32		0.19	0.16
ダンス	0.45	0.47	0.20	0.12
本番	0.40	0.40	0.20	0.12
最初	0.38	0.45	0.18	0.11
練習	0.32	0.36	0.18	0.18
グループ	0.33	0.37	0.21	0.11
授業名	0.33	0.25	0.13	0.10
先生	0.39	0.28	0.16	0.05
とても	0.24	0.31	0.14	0.11

※数値は jaccard 係数、0.30 以上の強い関連のある部分は色付けして示した

表４より、「つくる」は「良い」「楽しさ」などの 13 コード、「創作の教材」は「良い」「ない」などの 13 コード、「振り付け」は「覚える」の 1 コードと関連が強く、「既成の振り付けがある教材」には強い関連のあるコードはなかった。ここで抽出されたコードのうち、「先生」と「つくる」はクラスター 7、「覚える」はクラスター 1、それ以外の 15 コードは全てクラスター 2 に分類されたものであった（図 2）。よって、クラスター 2 に分類されたコードの各コード間の共起関係が強い結果となった。なお、「つくる」と「先生」（0.39）と、「振り付け」と「覚える」（0.36）にはクラスター 2 程度の強い関連がみられた。

また、「創作」に関わる 2 コード（「つくる」「創作の教材」）どちらとも強い関連があるコードは、出現回数の多い「良い」「楽しさ」「達成」や、「本番」「最初」「練習」「グループ」「ダンス」「授業名」の場面に関するコード、「やる」「思う」といった動詞であった。つまり、クラスター 2 に含まれるこれらのコードは、「創作の教材」のみならず、「つくる」とも関連が強いことが明らかとなった。なお、「ダンス」「授業名」「やる」「思う」の 4 コードは、あらゆる文章に含まれるコードであり、記述数が多いことに起因した強い関連であったといえる。

一方、これらのコードに関して、「振り付け」に関わるコードとはいずれも強い関連はなかった。

５．出現回数の性差

カイ 2 乗検定の結果、コード（54）×性別（2）（自由度 53）の中で、「大きく」、「見る」、「思う」、「合わせる」、「なおす」、「振り付け」の 6 コードに有意差が認められた。表 5 より、有意差のあった 6 コード全てにおいて女子のコード数が多かった。

表５　性差のあった６コードの出現回数

	大きく		見る		思う		合わせる		なおす		振り付け	
	出現回数	割合（%）	出現回数	割合（%）	出現回数	割合（%）	出現回数	割合（%）	出現回数	割合（%）	出現回数	割合（%）
男子（n=52）	3	5.88	10	19.61	25	49.02	5	9.80	0	0	5	9.80
女子（n=41）	13	30.95	18	42.86	30	71.43	14	33.33	6	14.29	14	33.33
合計（n=93）	16	17.20	28	30.11	55	59.14	19	20.43	6	6.45	19	20.43
カイ２乗値	8.48**		4.86*		3.90*		6.46*		5.60*		6.46*	

*p<0.05　**p<0.01

Ⅴ　考察

１．抽出語の特徴

最も出現回数の多いコードは「やる」（90 回）で、これは様々な連語関係がある語であるが、次に多く出現した「達成」（87 回）については、どの文章においても、できないことができるようになったという内容や、全てを終えて達成感を感じているといった内容で、ダンスワークショップの学習効果を表す語であったと考えられる。同様に、学習効果や参加者の気付きを表す語としては、54 回出現した「良い」や、41 回出現した「楽しさ」がある。これらは、ダンスワークショップを通して感じることのできた気持ちや肯定的な態度、あるいは学習したことに対する良いという気付きといった内容であると考えられる。

クラスター分析の結果から、「達成」と強い関連のある学習効果やそれを促進する要素を表す語としては、「良い」、「楽しさ」、「グループ」、「本番」、「練習」などがあった。よって、「グループ」で、「楽しさ」や「良さ」を味わうことで、達成感を感じることができたと想定することができる。なお、「本番」や「練習」といった場面でこれらを感じた可能性も考えられる。

また、男女間で差のあった６コード（「大きく」「見る」「思う」「合わせる」「なおす」「振り付け」）は、全て女子の方が多く出現していたことが明らかとなった。「大きく」が多いことから、女子の方が大きく動けたことを評価する傾向にあると考えられ、「見る」が多いことから、鑑賞の場面が印象に残りやすいと考えられる。さらに、「振り付け」を「なおす」ことや、「合わせる」ことにも強い印象があったと考えられる。ダンスの授業では、「ダイナミックに大きく動くこと[15)p.6]」や「大きく動くことや大きく動いているように見える動きの組み合わせ[8)p.2]」を評価することがある。つまり、これができることを良い評価とみなしているといえる。また、鈴木（2014）によれば、幼児のダンス活動（習い事）は、男子が 0.9% に対して、女子が 5.8% と、女子の方が多い。よって、元々ダンスが好きである参加者やダンス経験者が女子に多いため、大きく踊ることを良いとみなしたり、「振り付け」に興味を持つのではないかと考えられる。

一方で、記述した語数自体が女子の方が多かったため、女子の方が自由記述を多く書く傾向があるとも考えられる（男子：一人当たり 23.58 語、女子：一人当たり 27.27 語）。

２．ダンスワークショップによる学習効果の構造

図２に示す軸の解釈を行い、ダンスワークショップによる学習効果の構造を調べた。

図２の横軸において、正方向に寄与した３クラスターに共通する点は、グループにおける活動での学習や感じたことが含まれており、負方向に寄与した４クラスターはグループより大きい集団（クラス）における気付きや、集団における個人の成長に関する内容が含まれている。よって、横軸は、自分の意見や態度が分かりやすく反映されるコミュニケーションの場における学習内容と学習効果（正方向）と、大きな集団

の中で自分を自覚することで得られる学習内容と学習効果（負方向）を表す軸であると考えられる。

一方、杉浦ほか（2015）によれば、恥ずかしさはダンスを含む身体表現活動において起こる特徴的な反応であるとともに、生徒にとって障がいとなる態度である。また、内山ほか（2013）も、「ダンス学習は、恥ずかしさを感じさせる条件が十分過ぎるほど揃っている」と指摘している[24)p.73]。よって、縦軸において負方向へ寄与した「恥ずかしい」が含まれるクラスター４はダンス特有の態度を表すといえる。そして、残りの負方向へ寄与した２クラスターも、「創作」と「振り付け」というダンス特有の教材に対する反応であり、負方向はダンス特有の学習内容による態度やその具体的な内容を表すと考えられる。これに対し、縦軸において正方向へ寄与した４クラスターは、同様に「創作」や「振り付け」の場面と関連した記述も含まれるもののグループ活動や、発表場面における協力や感謝、努力など、踊ることではなくワークショップという形式において実現される学習全般を指す内容であると考えられる。よって、負方向はダンス特有の学習内容による態度やその具体的な内容、正方向はワークショップという形式によって実現される全般的な学習を表す軸であると考えられる。

３.「創作」と「振り付け」への着眼

一定の手順で設定されたコードのうち、「つくる」と「創作の教材」を「創作」に関わるコードとし、「振り付け」と「既成の振り付けがある教材」を「振り付け」に関わるコードと解釈したところ、「創作」に関わるコードの方が、「振り付け」に関わるコードより多く出現した（創作：87 回、振り付け：31 回）。

また、２コード間の共起関係の点検により、「創作」に関わるコードと強い関連のあった特徴的なコードは下記のコードであった。それは、「良い」「楽しさ」「達成」といった心理的な態度や学習効果と「本番」「最初」「練習」「グループ」などの場面に関するものであった。これらは、クラスター分析においても、同クラスターにおいて距離の近いコードであり、「創作」の学習効果および印象に残る場面であると考察できる。他に強い関連があると分析されたコードに、「つくる」と「先生」があった。よって、グループごとの「創作」において、参加者は、楽しさや良さを味わい、達成感を感じることができたといえる。また、本番や練習といった場面、先生の影響で、最初よりもこれらを感じた可能性もある。以上の「創作」の学習効果およびそれに影響する事柄が、「創作」と「振り付け」を合わせて行ったことによる学習効果であるのか、「創作」の特徴であるのかは比較による検証が必要である。

一方、「振り付け」に関わるコードは、２コード間の点検において、「振り付け」と「覚える」にのみ強い関連があった。しかし、これらのコードは、クラスター分析において、異なるクラスターに分類された。同クラスターに分類されたコードには、「緊張」という態度、「周りの人」「たくさん」といった名詞、「間違える」といった動詞があった。よって、「振り付け」に関するコードに関しては、母数が少ないため、分析方法によって結果が異なったと考えられる。

カイ２乗検定においては、女子の方が多く「振り付け」の語を記述したことが明らかとなり、「振り付け」の活動は男子より女子の方が印象に残っていることが確かめられた。

Ⅵ　まとめ

本研究の目的は、「創作」と「振り付け」を含む教材を用いた芸術家によるダンスワークショップを事例とし、それに参加した小学６年生による自由記述の内容から、「創作」と「振り付け」を含むダンスワークショップ教材の学習効果を明らかにすることであった。その結果、本研究の事例における小学６年生への学習効果は、自分の意見や態度が分かりやすく反映されるコミュニケーションの場における学習と、大きな集団の中で自分を自覚することで得られる学習に分類されるものとみられた。例えば、前者に含まれる学習は、自分の意見を言うことの難しさや、コミュニケーションにおける喜び、協力の大切さなどであり、後者では、自分の苦手な動きを知ることや、恥ずかしさを克服することによる達成感などであった。さらに、これらの

学習はワークショップ学習の特徴的な効果とダンス学習の特徴的な効果に分類されるものとみられた。

また、出現語数から、「創作」と「振り付け」では、「創作」の方が印象に残っていた回答者が多かったか、あるいは強く印象に残って何度も記述した回答者がいたといえる。参加者は、グループごとの「創作」において、楽しさや良さを味わい、達成感を感じ、本番や練習といった場面、先生の影響がこの学習効果を促進すると考えられた。しかし、これは、「振り付け」の活動と比較されたものではない。「振り付け」に関する語は母数が少ないため、本調査では「創作」におけるような学習効果は確かめられなかった。一方、「振り付け」の活動は、男子より女子の方が印象に残っていたことが明らかとなり、性差による違いも考えられた。

本研究は、実際に行われたダンスワークショップを対象に、その学習効果を探索的に明らかにしたものである。今後は、創作活動のみを行う場合と、既成の振り付けの習得と合わせて創作活動を行う場合の比較研究を行う必要がある。

引用・参考文献

1）舞踊文化と教育研究の会（2010）日本における学校ダンスの歩み －故戸倉ハル先生を偲んで－．松本千代栄撰集　第 2 期－研究編 3 舞踊教育史・比較舞踊学領域．明治図書出版：東京，12-21.

2）コミュニケーション教育推進会議（2011）子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～．コミュニケーション教育推進会議審議経過報告．http://www.geidankyo.or.jp/12kaden/sites/default/files/pdf_com20110829.pdf（参照日 2018/1/12）

3）原田純子（2012）ダンス・ワークショップにおける学びについての一考察－創作体験とグループ活動の意味－．日本女子体育連盟学術研究，28，17-29.

4）樋口耕一（2003）コンピュータ・コーディングの実践：漱石「こころ」を用いたチュートリアル．年報人間科学，24（2），193-214.

5）樋口耕一（2017）社会調査のための計量テキスト分析　内容分析の継承と発展を目指して．ナカニシヤ出版：京都 .

6）金澤延美，山本長紀（2015）文字なし絵本の教材化からの一考察－短大保育科 1 年生対象の実践データの分析から－．駒沢女子短期大学研究紀要，48，1-7.

7）MacDonald，C.（1991）Creative dance in elementary schools: A Theoretical and practical justification. Canadian Journal of Education，16（4），434-441.

8）松本奈緒（2010）ダンス領域を教えるうえで，授業のポイントとは何か－中学校でのダンス必修化によせて－．保健体育ジャーナル，91，1-4.

9）茂木一司，郡司明子（2013）小学校におけるワークショップ型学習に関する実践研究 －お茶の水女子大学附属小学校の事例－．群馬大学教育学部紀要　芸術・技術・体育・生活科学編，48，53-66.

10）文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説　保健体育編．116-131.

11）文部科学省（2015）新しい学習指導要領等が目指す姿．中央教育審議会　初等中等教育分科会（第 100 回）配布資料．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm（参照日 2018/1/15）

12）文部科学省（2017）第 7 節保健体育　中学校学習指導要領．100-116.

13）中村恭子，浦井孝夫（2005）中学校における体育の種目選択制に関する研究 －ダンス領域を中心とした現状と問題点－．順天堂大学スポーツ健康科学研究，9，52-56.

14）中村恭子（2013）日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題．スポーツ社会学研究，21（2），37-51.

15）中村なおみ（2013）オリエンテーションとリズムに乗って踊ってみよう．全国ダンス・表現運動授業研究会（編）．明日からトライ！ダンスの授業．大修館書店：東京，6-9.

16）中野民夫（2001）ワークショップ－新しい学びと創造の場－．岩波書店：東京 .
17）太田早織（2009）戦後日本の体育科におけるダンスの位置づけに関する研究 －特に新体育形成期にみるダンスの教育的意義づけを中心として－．日本体育大学紀要，39（1），1-11.
18）齊藤堯幸（1983）多次元尺度構成法．計測と制御，22（1），126-131.
19）白井麻子（2012）コミュニティダンス・ワークショップの参加体験とイメージに関する研究 －大学生を対象として－．大阪体育大学紀要，43，53-65.
20）杉浦宏季，橘　和代，横谷智久，野口雄慶（2015）身体表現活動における羞恥心の要因の検討に有効な質問項目の選択．福井工業大学紀要，45，264-267.
21）鈴木尚子（2014）学校外教育活動に関する調査：幼児の塾や習い事―スポーツは５歳から．ベネッセ教育総合研究所．http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikuhi/webreport/report05_01.html（参照日 2018/1/11）
22）高橋るみ子，児玉孝文，長尾麻衣子（2008）アーティストが創るダンスの授業 ～中学校ダンスの必修化に向けて～．宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要，16，11-23.
23）高橋るみ子，豊福彬文，野邊壮平，児玉孝文，野邊麻衣子，西田英司，黒木森穂（2013）小中一貫教育支援：コミュニケーション能力の向上を目的としたダンス学習の成果と課題 ～宮崎大学教育文化学部附属学校の取組～．宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要，21，141-157.
24）内山須美子，松尾健太，奥山美希（2013）ダンス学習の動機づけに関するテキストマイニング分析 －中学生の「現代的なリズムのダンス」の授業を事例として－．白鷗大学教育学部論集，7（1），71-108.
25）矢入健久，前野俊昭（2007）同時可視データへの多次元尺度構成法の適用による地図作成．人工知能学会論文誌，22（3・I），342-352.
26）山口莉奈，正田　悠，鈴木紀子，阪田真己子（2017）体育科教員のダンス指導不安の探索的研究．日本教育工学会論文誌，41（2），125-135.
27）全国ダンス・表現運動授業研究会（2013）明日からトライ！ダンスの授業．大修館書店：東京 .